

国分田遺跡 2

—第4次調査—

大野城市文化財調査報告書 第212集

2024

大野城市

こく ぶ た 国分田遺跡 2

—第4次調査—

大野城市文化財調査報告書 第212集



2024

大野城市

序

福岡県大野城市は、福岡平野南部に位置し、西暦665年に築かれた古代山城「大野城」にその名を由来する、古い歴史と自然に囲まれた緑豊かな街です。市域は南北に長く、大野城跡、水城跡、牛頸須恵器窯跡の3つの国史跡をはじめ、多くの文化財があります。

国分田遺跡は瓦田二丁目に位置し、これまでの調査で古代から近世にかけての集落跡が確認されています。今回報告する第4次調査では、中世の井戸や、溝跡から大量の瓦器椀が見つかりました。

今後こうした成果を積み重ねていくことで、ふるさとの先人たちの暮らしぶりが明らかになるとともに、今に生きる私たちが地域の歴史の積み重ねの上にあることを知る機会となることを期待しています。

本書が学術研究はもとより、広く一般に活用され、地域歴史の解明や歴史教育の一助となり、文化財愛護の精神を醸成する手掛かりとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書作成にあたりご理解とご協力をいただきました関係者各位に対しまして、厚くお礼を申し上げます。

令和6年3月31日

大野城心のふるさと館

館長 赤司 善彦

例言

1. 本書は、大野城市が集合住宅建設にともなって発掘調査を行った「国分田遺跡第4次調査」の成果報告書である。
2. 発掘調査は事業者より委託を受け、大野城市が行った。
3. 発掘調査は齋藤明日香、澤田康夫が担当した。
4. 遺物写真は株式会社写測エンジニアリングに委託し、牛嶋茂が撮影した。
5. 遺構実測図中の方位は座標北を表し、座標は国土座標（第Ⅱ系）を使用している。
6. 遺物実測図は仲村美幸、小嶋のり子、古賀栄子、篠田千恵子、小畑貴子、津田りえ、氷室優、松本友里江、眞田萌世が作成した。
7. 図面の浄書は小嶋が行った。
8. 遺物観察表は小嶋が作成した。また、遺物は総番号とし、挿図と図版で統一した。
9. 本書に掲載した遺跡分布図は国土地理院発行の1/25,000電子地形図を使用し、各市の遺跡包蔵地分布図をもとに作成した。
10. 本書に使用する土色名は『新版標準土色帳』農林水産省技術会事務局監修を使用している。
11. 本書の執筆は澤田・龍が行い、編集は龍が行った。
12. 本書に掲載した遺物・実測図・写真はすべて大野城心のふるさと館が管理・保管している。

本文目次

I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査体制	1
II. 位置と環境	3
III. 調査の成果	
1. 調査概要	5
2. 遺構と遺物	6
IV. まとめ	11

挿図目次

第1図	既往調査区配置図 (1/2,500)	2
第2図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	4
第3図	調査区遺構配置図 (1/200)	5
第4図	SD01 南壁土層図 (1/40)	6
第5図	SD01 出土遺物実測図 (1) (1/3)	7
第6図	SD01 出土遺物実測図 (2) (1/3)	8
第7図	SD02 出土遺物実測図 (1/3)	9
第8図	SE01 遺構実測図 (1/40)	9
第9図	SE01 出土遺物実測図 (1/3)	10

表目次

第1表	国分田遺跡第4次調査遺物観察表 (1)	13
第2表	国分田遺跡第4次調査遺物観察表 (2)	14

写真図版

図版1	(1) 調査区南半全景 (北から)	(2) 調査区北半全景 (南から)
図版2	(1) SD01 南壁土層	(2) SD01 遺物出土状況 (北から)
	(3) SD01 南半完掘状況 (北西から)	
図版3	(1) SD01 北半完掘状況 (南から)	(2) SD02 完掘状況 (東から)
図版4	(1) SE01 東壁土層	(2) SE01 遺物出土状況 (北東から)

(3) SE01 完掘状況 (南から)

図版 5 遺物写真図版 1

図版 6 遺物写真図版 2

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

国分田遺跡は大野城市瓦田二丁目を中心に広がる遺跡で、古代から近世にかけての遺構が確認されている。本調査地については、平成30年11月30日に確認調査を実施したところ、地表下80cmの深さで遺構が確認された。当該地では集合住宅の建設が予定されており、計画通り施工されれば遺構が破壊されることから、遺構の保護が図れるよう事業者申し入れを行ったが、遺構保護は設計上困難であるとの回答を得、発掘調査を行う運びとなった。

事業者からは令和4年3月4日に埋蔵文化財発掘調査依頼書・承諾書が提出され、令和4年3月28日付で建設予定図を添えて発掘届を福岡県教育委員会文化財保護課宛に提出したところ、令和4年3月29日付で発掘調査を実施する旨指示が出された。事業者とは令和4年度に発掘調査、令和5年度に整理作業を行うことで協議が整い、令和4年4月14日から令和4年6月17日にかけて発掘調査を行った。調査は開発面積280㎡について行い、また費用は大野城市と事業者で半額ずつを負担した。

発掘調査の実施・報告書作成に際し、多大なるご理解を頂いた事業者並びに関係者の皆様には、記して感謝の意を述べたい。

2. 調査体制

令和4年度（発掘調査）

大野城市長	井本 宗司
大野城心のふるさと館長	赤司 善彦
大野城市地域創造部長	増山 竜彦
心のふるさと館文化財担当課長	石木 秀啓
係長	林 潤也、上田 龍児
主査	徳本 洋一
主任主事	秋穂 敏明
主任技師	山元 瞭平
技師	齋藤 明日香
会計年度任用職員	(調査) 澤田 康夫、石川 健 (庶務) 小川 久典、清水 康彰、大塚 健三 (現場作業) 篠崎 繁美、東島 真弓、 安里 由利子、船越 桃子、小林 敏子、坂本 泰子、 浅田 ふえ、川崎 敏次郎、佐藤 寛行、吉田 秀俊、 田中 良一 (事務補助) 山上 恵子、井之口 彩子

令和5年度（整理作業・報告書作成）

大野城市長	井本 宗司
大野城心のふるさと館長	赤司 善彦

大野城市地域創造部長
 心のふるさと館文化財担当課長
 係長
 主査
 主任技師
 主任主事
 会計年度任用職員

日野 和弘
 石木 秀啓
 林 潤也、上田 龍児
 濱田 裕之（～6月）
 龍 友紀、山元 瞭平
 下川 みお（7月～）
 （調査）澤田 康夫、石川 健
 （庶務）清水 康彰、藤田 香
 （整理作業）仲村 美幸、小嶋 のり子、
 古賀 栄子、篠田 千恵子、小畑 貴子、津田 りえ、
 氷室 優、松本 友里江、眞田 萌世
 （事務補助）井之口 彩子、西村 恭子



第1図 既往調査区配置図 (1/2,500)

Ⅱ．位置と環境

福岡県大野城市は福岡平野の南東部に位置し、南北に細長い瓢箪形の市域をなす。市域の北側には井野山・乙金山・四王寺山、南側には牛頸山とそこから派生する丘陵が広がる山に囲まれた地形である。市北部から中央の平野部には宝満山を水源とする御笠川が流れ、市の中央部で南部から流れる牛頸川と合流して博多湾に注いでいる。国分田遺跡はこの御笠川と牛頸川の合流地点から700 mほど牛頸川を遡った位置にあり、周辺は近代以降の鉄道敷設や宅地化により平坦な地形となっているが、西側の1次調査地など部分的に小高い地形も残っている。ここでは、国分田遺跡の中心時期である中世から近世にかけての周辺遺跡を概観したい。

中世以降、周辺では博多遺跡群が隆盛し、それまでの大宰府や鴻臚館にかわり中世都市「博多」が対外交易の拠点となる。この時期には御笠川周辺で遺跡が増加するとともに、11世紀後半以降、丘陵部の開発が進んで新たな集落が各地で営まれるようになる。集落では御笠の森遺跡で11世紀から12世紀後半にかけての井戸や区画溝等が確認されているほか、薬師の森遺跡、上園遺跡、天神田遺跡群などで瓦器や生産関連遺物が出土しており、このうち薬師の森遺跡と天神田遺跡では瓦器の焼成遺構も確認されている。集落単位で盛んに瓦器生産が行われたことが伺える。このほか墓地では、塚口遺跡、森園遺跡、松葉園遺跡で輸入陶磁器を副葬する土壙墓が確認されている。国分田遺跡ではこの時期の溝跡などから瓦器碗や白磁等が見つかるが、調査事例が少ないため詳細は明らかとなっていない。

その後、鎌倉から戦国期にかけては様相が不明な遺跡が多いものの、御笠川西岸域の麦野遺跡群や石勺遺跡、川原遺跡、東岸域では立花寺遺跡や中・西コモリ遺跡、塚口遺跡、薬師の森遺跡、森園遺跡などで当該時期の遺構が確認されている。中でも大城山・乙金山の山裾に位置する薬師の森遺跡では、輸入陶磁器が副葬された木棺墓・土壙墓や多数の方形区画が見つかるなど、市域で有力者の存在が垣間見える。御笠の森遺跡では、この時期多数の井戸や方形区画が展開され、活発な活動が見て取れる。

また戦国期の城郭として、岩屋城の向城であった乙金地区の唐山城や牛頸地区の不動城がある。現在では詳細な様相が不明となっているものの、江戸時代中期に貝原益軒が著した「筑前国続風土記」にその名が記されている。このほか、16世紀代には御笠の森遺跡で多数の方形区画溝が展開し、近世まで継続して集落が営まれる。

近世には市内平野部の各所で遺跡が確認されており、後原遺跡や雑餉隈遺跡、錦町遺跡、村下遺跡、瑞穂遺跡などで、集落跡や近世墓が確認されている。御笠の森遺跡では方形区画溝は遅くとも17世紀代に廃絶し、以後の遺構はほとんど確認されない。『筑前国続風土記拾遺』には、同時期の洪水による全村移転の記事がみられ、古文書と発掘調査の結果が一致するという点で意義深い。また近隣には旧国道三号線に並行する形で旧日田街道が通っており、博多と太宰府の中間地点にあたる雑餉隈遺跡は「間の宿」として栄え、人々の往来も非常に盛んであった。このほか旧白木原の「本村」に比定される後原遺跡があり、地祿神社を中心とした近世集落の景観が明らかとなりつつある。



- | | | | | | |
|-------------|-------------|-------------|------------------|------------|-----------|
| 福岡市 | 大野城市 | 22. 原口遺跡 | 34. 此岡古墳群 | 46. 瓦田後田遺跡 | 57. 永福遺跡 |
| 1. 井相田遺跡 | 11. 仲島遺跡 | 23. ヒケシマ遺跡 | 35. 原田遺跡 | 47. 古賀遺跡 | 58. 末次遺跡 |
| 2. 麦野B遺跡 | 12. 川原遺跡 | 24. 中・寺尾遺跡 | 36. 金山遺跡 | 48. 原ノ畑遺跡 | 59. 向川路遺跡 |
| 3. 麦野C遺跡 | 13. 御笠の森遺跡 | 25. 森園遺跡 | 37. 金ヶ浦遺跡 | 49. 大道端遺跡 | 60. 唐土遺跡 |
| 4. 雑餉隈遺跡 | 14. 宝松遺跡 | 26. 松葉園遺跡 | 38. 曲り目遺跡 | 50. 後原遺跡 | 61. 谷川遺跡 |
| 春日市 | 15. 村下遺跡 | 27. 御手洗遺跡 | 39. 笹原古墳 | 51. 御供田遺跡 | 62. 天神田遺跡 |
| 5. 駿河遺跡 | 16. 雑餉隈遺跡 | 28. 薬師の森遺跡 | 40. 釜蓋原遺跡 | 52. 池田・池之上 | 63. 水城跡 |
| 6. 駿河B遺跡 | 17. 御陵遺跡 | 29. 原口古墳群 | 41. 汐井川遺跡 | 遺跡 | |
| 7. 駿河E遺跡 | 18. 唐山遺跡 | 30. 雉子ヶ尾遺跡Ⅲ | 42. 中ノ原遺跡 | 53. ハザコ遺跡 | |
| 8. 立石遺跡 | 19. 善一田遺跡群 | 31. 雉子ヶ尾古墳群 | 43. 石勺遺跡 | 54. 梅頭窯跡群 | |
| 9. 先ノ原B遺跡 | 20. 王城山遺跡群 | 32. 雉子ヶ尾遺跡Ⅱ | 44. 瑞穂遺跡 | 55. 本堂遺跡 | |
| 10. 春日公園内遺跡 | 21. 古野遺跡群 | 33. 雉子ヶ尾遺跡 | 45. 国分田遺跡 | 56. 上園遺跡 | |

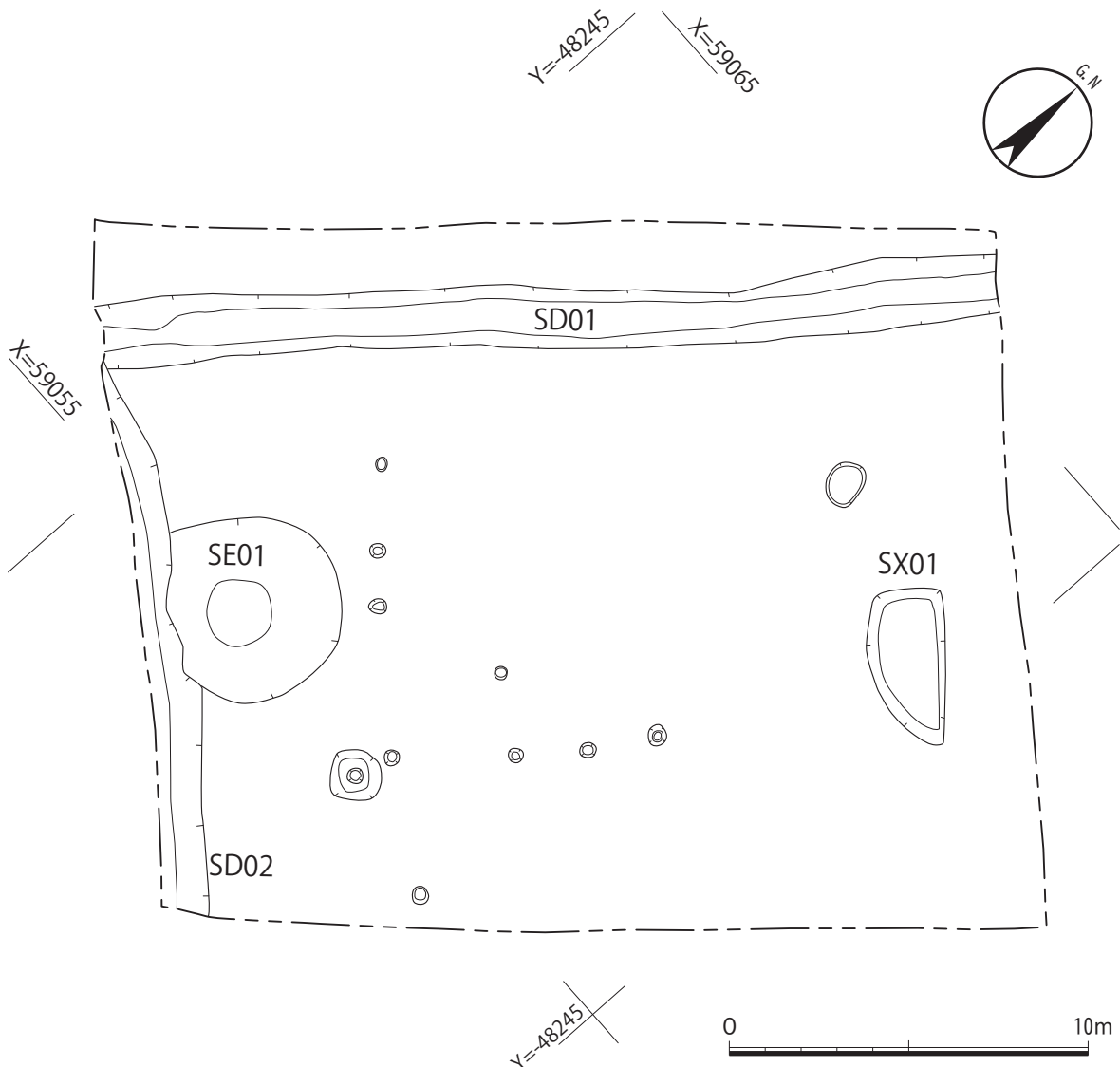
第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

Ⅲ．調査の成果

1．調査の概要

調査地の標高は約 21 ～ 22 m で、これまでの調査と試掘結果により、古墳時代から近世にかけての遺物・遺構が出土している。令和 4 年 4 月 13 日から 4 月 19 日にかけて調査区の表土掘削を行い、4 月 20 日より西半部の遺構掘削、5 月 23 日～ 30 日にかけて反転を行い、6 月 1 日～ 3 日まで反転部の調査、6 月 4 日以降埋め戻しを行い、現場撤収の後令和 4 年 6 月 17 日にすべての作業を終了した。

調査では柵列 2、溝 2 条、井戸 1 基、土坑 1 基を確認した。調査区は全体的に削平されており、検出したピット等は残りが僅かであった。出土遺物は比較的少ないものの、中近世の瓦器碗を中心にコンテナ 2 箱分の遺物が出土している。



第 3 図 調査区遺構配置図 (1/200)

2. 遺構と遺物

(1) 柵列

SA01

カギ形に屈曲する柵で、直径 20cm 程のピットが並ぶ。黒紫色の粘質土が埋土で共通するので、関連するピットと思われ、柵列と考えた。検出したピットは深さ 10～15cm 程度を残すのみで上部は削平されており、柵列の両端は削平されて消滅したか、元々この形状だったか不明である。出土遺物は無く他遺構との関連も不明と言わざるを得ないが、明らかに周辺遺構と時期の隔たる遺物もないため、他の遺構との関連性は高いと考える。

(2) 溝跡

SD01

調査区の北辺で検出した北東から南西方向へ直線的に伸びる溝である。溝断面は U 字形を呈し、幅 80cm、深さ 20～30cm を検出した。溝埋土は褐色系の土が暫時埋まった様子が窺えるが、最下層は薄く砂層が認められ、水流のあったことが分かる。溝底のレベルは北東方向が 10cm ほど低く、水は北東方向へ流れていたものと思われる。両端が調査区外へ伸びその形態は不明だが、この遺構と切り合う SD02 の形態を考えると方形区画溝になる可能性が高い。

出土遺物 (第 6 図・図版 5)

土師器 (1～9) 1～4 は小皿。すべてヘラ切りである。2～4 は底部外面に板状圧痕が残る。1 は復元径 8.6cm で四分の一程度残存する。口縁部は小さく外側に広がる。2 は三分の一程度残存し、復元径は 7.7cm である。3 は復元径 8.2cm。底部に粘土の塊が付着する。4 は底部のみ四分の三ほど残存する。

5 は杯。底部はヘラ切りで板状圧痕が残る。胎土は精良であるが、焼成はやや軟質である。

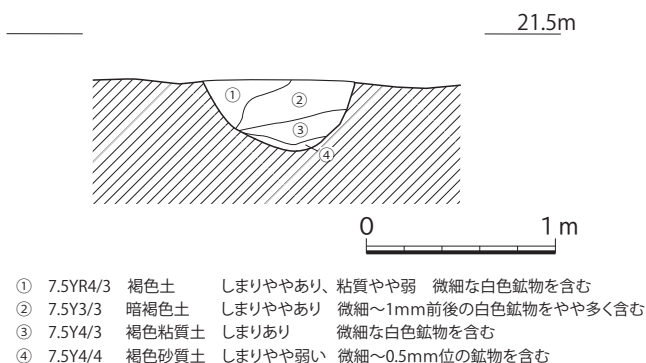
6 は壺。口縁部は小さく外反する。外面は指オサエとナデにより成形されるが、数か所に靱殻のような圧痕が残っている。内面は口縁部付近以外はほぼ調整されておらず、接合とシボリの痕跡が残っている。

7 は器台の頸部。両側が欠損しているが、下部は接合部分で剥離している。胎土は精良である。

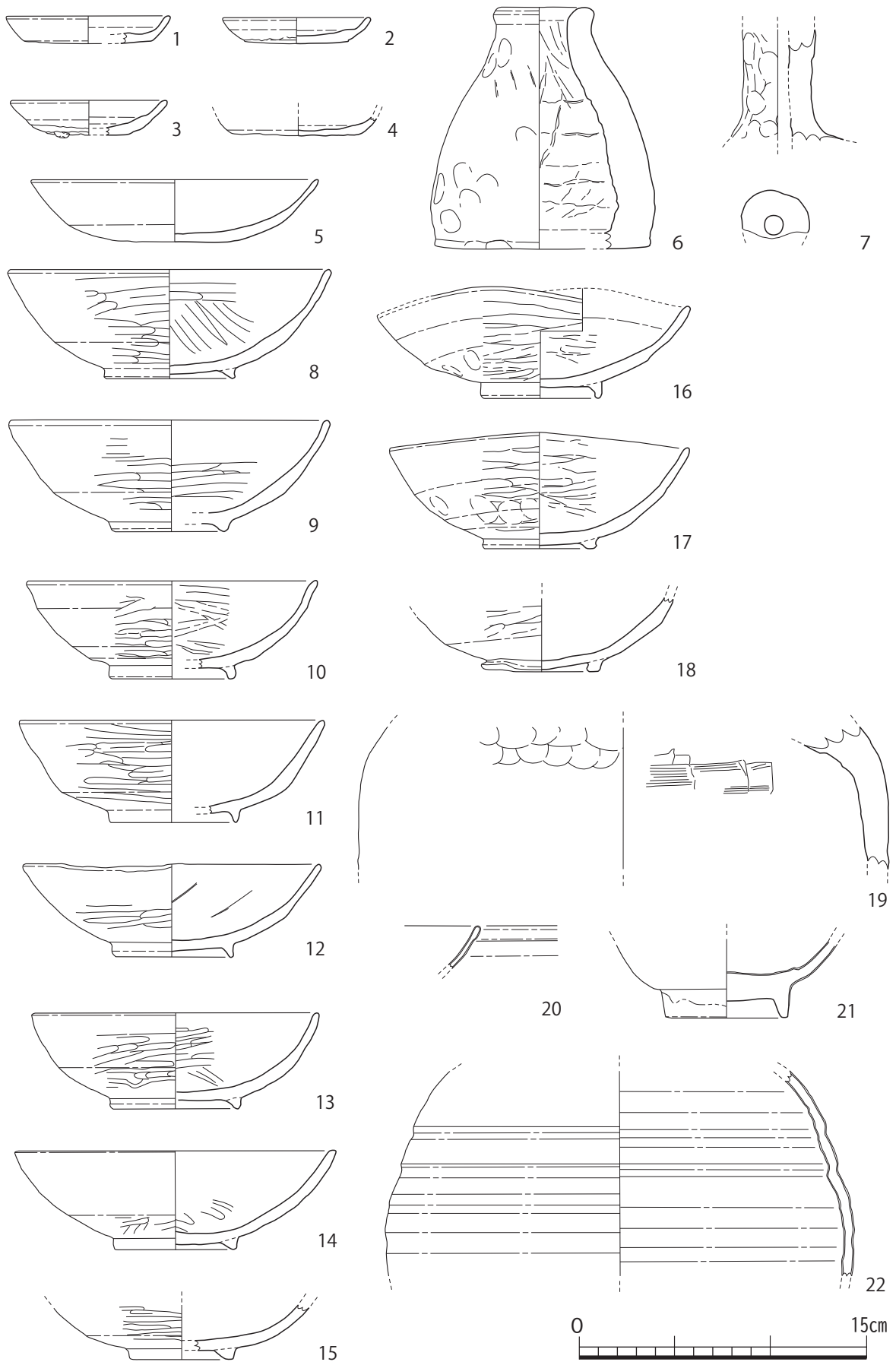
8・9 は高台付きの椀。焼成は土師質であるが、形態・調整は瓦器椀と同様である。

瓦質土器 (10～19) 10～18 は瓦器椀。

10 は歪みが激しい。高台はやや外側に広がる。11 は硬質の焼成で、須恵器のような見た目である。外面はまんべんなくミガキが施され、高台は直立する。12 は内面にコテ当ての痕跡が残る。13 は硬質の焼成で須恵器のようになっており、器面は丁寧に磨かれる。14 は底部に板状圧痕が残る。15 は底部三分の一ほど残存する。高台径は 5.4cm に復元され、内面に重ね焼きの痕跡が残る。16 は著しく歪ん



第 4 図 SD01 南壁土層図 (1/40)



第5図 SD01 出土遺物実測図 (1) (1/3)

で体部から口縁にかけて楕円形に変形している。内面には重ね焼きの痕跡が残る。高台は直立する。17は歪んで高台もつぶれている。高台径は6.0cm。18は高台が半分ほどつぶれている。体部中位に押し出しの際の屈曲があり、底部外面には板状圧痕が残る。

19は火鉢。外面は指オサエ、内面にハケ調整が施される。

陶磁器 (20・21) いずれも白磁碗。20は口縁部の小片。口縁部は小さく玉縁状になり、内面はやや濃色。うすく灰青みを帯びた釉調である。20は見込みに段を持ち、高台は高く直立する。マットな釉調で、体部外面に施釉し、高台にかかった部分は釉を落としている。白磁碗V-1類。

22は陶器壺。肩部～胴部付近か。胎土は小豆色に近く、内外面に褐色釉が薄く施される。

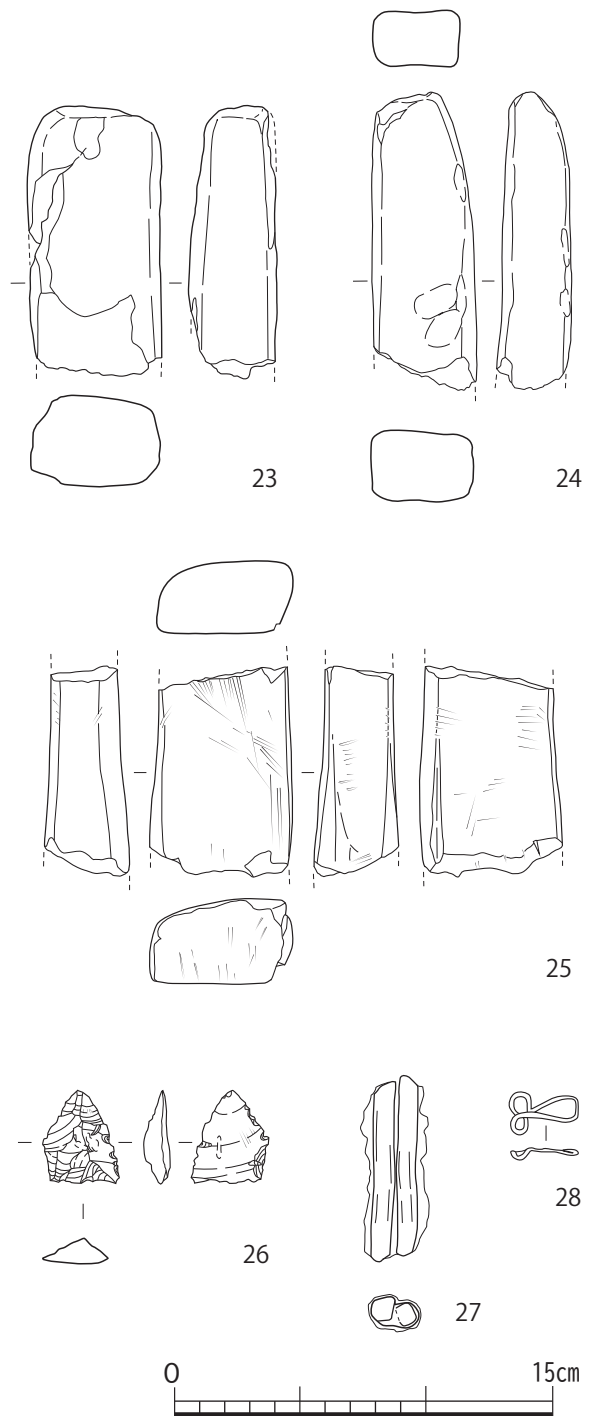
土製品 (23・24) 23・24は棒状土製品。23は断面が長方形で端部も方形を意識して成形されている。胎土は砂粒を多く含み、粘土の練りこみが甘いのか胎土がマーブル状になっており、断面には成形時に粘土を折り込んだ痕跡が残る。24は断面方形で、残存長11.8cm。胎土は砂粒を多く含み、先端部をやや尖らせる。

石製品 (25・26) 25は砥石。緻密な砂岩製で四面とも使用されており、側面は一部丸みを帯びる。筋状の研ぎ跡のほか、側面にはV字状の研ぎ跡が残る。欠損した部分にも使用痕が残る。

26は黒曜石製の石鏃未成品。基部が欠損し、中央には白色の不純物が入る。

金属製品 (27・28) 釘。2本が錆着した状態で出土した。両端部は折損している。

28は銅製品か。直径1mm程度の銅線を曲げてばね状にしたもの。用途は不明である。全体が錆びて緑青に覆われている。出土時点で土師器と土に付着していたが、破損を防ぐためそのままの状態で見つけている。



第6図 SD01 出土遺物実測図 (2) (1/3)

SD02 (第3図 図版6)

調査区の西辺で溝の肩を検出した。殆どが調査区外で全様は知れないが、SD01、SE01を切り、検出した遺構の中では一番新しいものである。土層観察によると、本溝はSD01を切るところでほ

ほぼ直角に曲がり、方形の区画溝を呈すると思われる。溝幅は不明だが、深さは検出した部分で約60cmを測る。調査終了後に重機で調査区西側に小トレンチを入れて溝の西肩をプランで確認したが、それによると溝幅は1mを測る。

出土遺物（第7図、図版6）

土師器（29） 口径13.9cmに復元できる杯で、三分の二程残存する。胎土はやや粗く砂粒を多く含む。底部ヘラ切り。

陶磁器（30・31） 30は耳壺か。胎土はにぶい橙色で、内外面ナデ成形後横向きに耳を貼り付ける。外部表面に褐色の釉がわずかに残る。31は青磁椀。見込みに白色の象嵌で2条の圈線が描かれ、圈線内に方形、見込み中央に円形の窪みが型押しされる。釉は全面に施釉され、高台畳付のみ掻き落される。初期高麗青磁か。

鉄製品（32） 釘である。断面方形で先端部は曲がって折損する。残存長7.85cm。

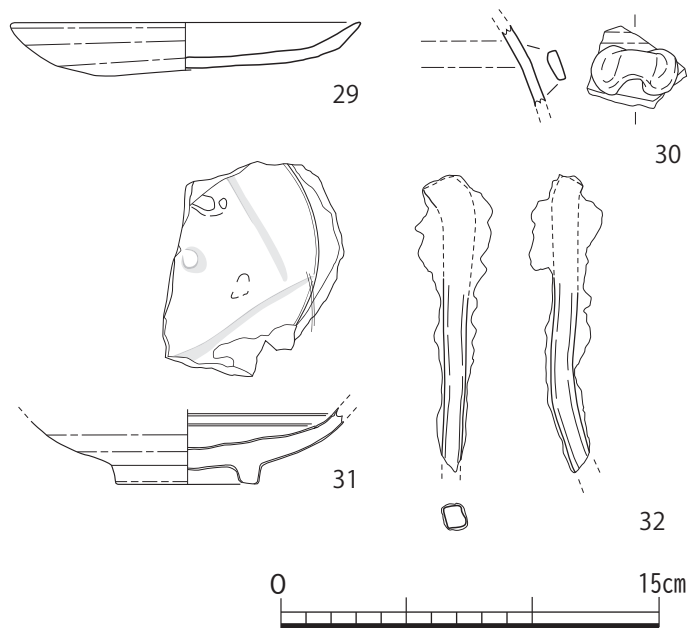
（3）井戸跡

SE01

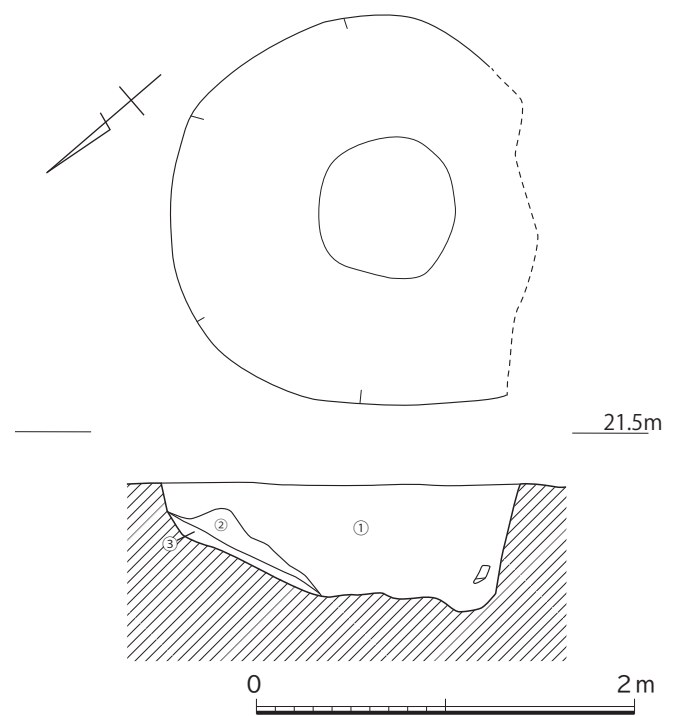
調査区南辺中央付近で検出した。南辺をSD02に一部切られているが、直径2.6mのほぼ正円形プランを呈し、深さ約2.5mを残す。断面形は逆台形で、井戸枠は検出しなかったが、暗灰色の埋土除去中に、底面中央に土色の異なる埋土が70cm程の円形に認められ、不明確ではあるがこれを井戸枠の痕跡と考え、本遺構を井戸と推定した。

出土遺物（第9図、図版6）

土師器（33～39） 33～35は丸底杯。33は四分の三程度が残存するが、内外面ともに摩滅が著しく調整は不明である。34は三分の一程が残存し、体部中央でわずかに上方に屈曲する。底部はヘラ切り後ナデ調整。35は口縁部の一部のみ欠損。内外面回転ナデで仕上げられるが、部分的に指オサエ、コテ当ての痕跡が残る。底部には板状圧痕が残る。36は底部が残存しないが高台が

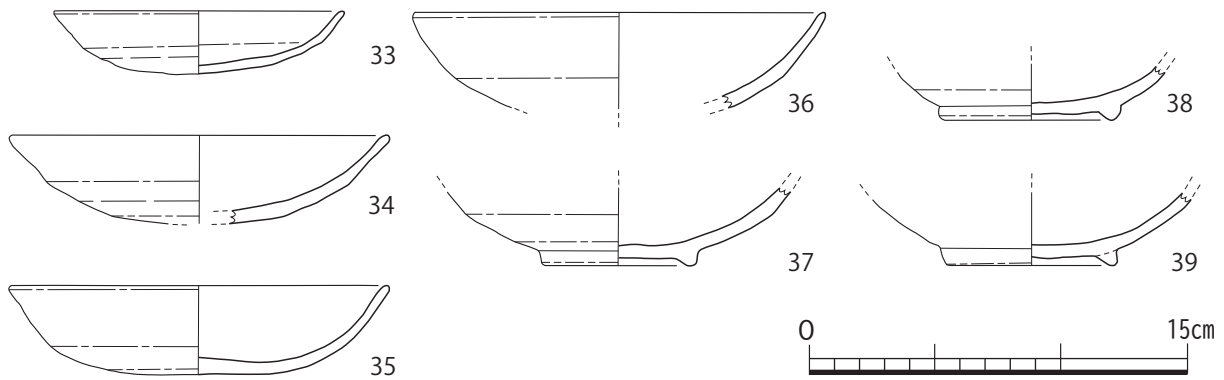


第7図 SD02 出土遺物実測図（1/3）



- ① 7.5YR3/2黒褐色砂質土 しまりあり 1mm前後の白色鉱物を多く含む
- ② 7.5YR4/3褐色粘質土 しまりあり 地山ブロックを多く含む
- ③ 7.5YR4/2灰褐色砂質土 しまりあり 地山ブロックを少量含む

第8図 SE01 遺構実測図（1/40）



第9図 SE01 出土遺物実測図 (1/3)

つくものか。復元径 16.4cm。37～39 は椀。37 は断面三角形の高台が貼り付けられ、接合部は丁寧にナデ消される。高台は小さく、復元径は 6.15cm。被熱のためか底部外面がやや赤みを帯びている。38 は断面かまぼこ形の高台が貼り付けられる。高台内面は接合部がナデ消されるが、外面には接合の跡が残ったままである。39 は高台の貼り付け部が丁寧にナデ消される。焼成は良好で胎土もやや硬質である。

(4) 性格不明遺構

SX01

調査区北辺中央で検出した。地山と同系の土に黒色系が混入する円形に近いプランを遺構検出時には確認できたが、除去できる土を除去した結果、最終的には半月形に近いプランの土壌となった。深さ 20cm程を残す。床面は東から西へ若干傾斜を持ち 10cm前後の比高差がある。出土遺物は小片のため図示できるものはなかったが、スサ入り粘土塊が少量出土している。

IV. まとめ

1. 遺構の時期

国分田遺跡はこれまで調査事例が少なく、牛頸川の氾濫や過去の区画整理等の影響により、中世から近世の遺跡であるという以外には実態に不明な点が多かった。今回の調査では切り合い関係により時期差がわかる遺構とともに、焼け歪んだ瓦器碗や棒状土製品といった瓦器焼成関連の資料が多く出土した。中世期における良好な資料を得ることができたといえよう。ここでは、各遺構の時期について検討を加え、調査成果をまとめたい。

本調査で出土した遺構のうち、切り合いによりSE01→SD01→SD02の時期関係が分かっている。SD01からは大量の瓦器碗と土師器の他、白磁碗などが出土しており、11世紀末から12世紀初頭ごろまでに埋没したものとみられる。これと切り合うSD02からは瓦器碗は出土していないものの、初期高麗青磁が出土しており、SD01とほぼ同じ11世紀後半から12世紀前半までにあたるものと考えられる。切り合い関係はあるが両者の間にはそれほど時期差がなく、また掘り直し等も行われていないことから遺構の存続期間自体が短かった可能性が高い。溝の性格は前述のとおり方形の区画溝と考えられ、SE01のある東側には屋敷地が広がっていると推定される。

またSE01は、出土遺物が土師器のみで瓦器碗や陶磁器が含まれず、SD02に切られていることから、溝より少し遡る時期に埋没したと考えられる。丸底杯は口径が11.5cm、器高2.5cmとやや小形のものと同口径15cm程度の二種があり、碗は後者に低い高台がついた扁平な形状である。瓦器碗が一般化する直前から継続して集落が営まれていたとも考えられるが、集落の動態や区画規模等の具体的な遺跡の様相については現状では不明な点が多く、今後の調査を待ちたい。

2. 瓦器碗の生産について

今回の調査区で焼成遺構と断定できる遺構は確認されなかったものの、近辺で瓦器生産を行っていた可能性は高いと考えられる。近隣では九州大学筑紫地区遺跡（御供田遺跡）や上園遺跡などで瓦器碗焼成関連の遺物が多く出土しており、焼成に関わる棒状土製品の出土も福岡平野南部で顕著に多いことがこれまでに指摘されている（山元2022）。SD01から出土した瓦器焼成関連遺物についても、それに係属する一群であると判断できよう。瓦器碗は焼け歪んだものが多く法量の傾向が出しづらいが、残りの良いものでは口径16cm前後、器高5cm前後となる。体部の屈曲が残るものが多く、ヘラミガキが丁寧に施されており、中島恒次郎氏による分類の瓦器碗Ⅱ-1類に分類できる（中島1992）。またその他の特徴として、意図的なものなのかは不明であるが焼成がやや硬質なものが多く、須恵器に近いような見た目のもが含まれている点が挙げられる。さらに、SD01からはヘラミガキを施した丸底の土師碗も出土している。形態や製作方法は瓦器碗と同じであり、前述の中島氏による編年の土師器碗Ⅳ類に分類できるものである。この土師碗が意図的に酸化焰焼成したものか瓦器碗の焼成不良品であるのかは判断できないが、SD01から出土した土師碗は口径が16cm後半と瓦器碗よりもやや大きく、厳密に同じ品といえるかはやや疑問が残る。

瓦器碗そのものの形式にはほとんど差違がみられず、またSD01以外の遺構からは瓦器碗が出土していないことから、焼成はごく短期間のうちにしか行われなかったと考えられる。これが集落動

態とどのように関連しているかは今後の調査を待つ必要があるものの、本調査の成果は中世前期における瓦器椀生産開始期の様相や平野部での集落の広がりを知る有効な手がかりの一端となるのではないだろうか。

〈主要参考・引用文献〉

柴田 亮・上床 真・横手伸太郎 2022「第11章 九州」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』
日本中世土器研究会編 真陽社

中島 恒次郎 1992「大宰府における椀形態の変遷」『中近世土器の基礎研究』Ⅷ 日本中世土器研究会

山本 信夫 1988「統計上の土器—歴史時代土師器の編年研究によせて—」『乙益重隆先生古希記念論文集』

山元 瞭平 2022『上園遺跡9』大野城市教育委員会

第1表 国分田遺跡第4次調査遺物観察表(1)

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値) <残存値>	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
1	土師器	小皿	Ⅱ区 SD01	①(8.6) ②1.45 ③(6.7)	底部外面へラ切り 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内外 5YR6/6 橙色	
2	土師器	小皿	Ⅱ区 SD01	①(7.7) ②1.35 ③(5.4)	底部外面へラ切り 他は回転ナデ 底部外面板状圧痕あり	A:微細な白色砂粒、赤褐色粒、雲母を含む B:良好 C:内外 7.5YR8/4 浅黄褐色	
3	土師器	小皿	Ⅱ区 SD01	①(8.2) ②1.95 ③(4.6)	底部外面へラ切り 底部内面指オサエ 他は回転ナデ 底部外面粘土塊付着 底部外面板状圧痕あり	A:微細な白色砂粒、赤褐色粒、雲母を含む B:良好 C:内外 7.5YR7/4 にぶい橙色	外面粘土塊付着
4	土師器	小皿	Ⅱ区 SD01	②<1.0> ③6.7	底部外面へラ切り 他は回転ナデ 底部外面板状圧痕あり	A:微細な白色砂粒、赤褐色粒、雲母を含む B:良好 C:内外 10YR8/3 浅黄褐色	
5	土師器	杯	Ⅱ区 SD01	①15.0 ②3.3	内外面回転ナデ	A:微細な白色砂粒を少し含む B:良好 C:内 7.5YR8/3 浅黄褐色 外 10YR8/3 浅黄褐色	
6	土師器	壺	Ⅱ区 SD01 床上	①5.2 ②12.6 ③(11.3)	ナデ成形 体部外面指オサエ 体部外面工具痕か? 頸部外面工具痕あり 頸部内面シボリ痕あり	A:3mm以下の白色砂粒、長石、石英、雲母を含む B:良好 C:内 7.5YR8/2 灰白色~7.5YR5/1 褐灰色 外 7.5YR8/3 浅黄褐色	
7	土師器	器台	Ⅱ区 SD01		指オサエ成形	A:微細な白色砂粒、雲母を少し含む B:良好 C:内外 7.5YR8/3 浅黄褐色	
8	土師器	椀	Ⅱ区 SD01	①(16.9) ②5.7 ④(6.8)	内面不定方向ナデ 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒、石英を多く含む B:良好 C:内外 7.5YR8/6 浅黄褐色	
9	土師器	椀	Ⅱ区 SD01	①(16.8) ②5.8 ④(6.15)	内外面回転ナデ 体部外面中位指オサエ	A:4mm以下の白色砂粒、石英を多く含む B:良好 C:内外 10YR8/2 灰白色	
10	瓦器	椀	Ⅱ区 SD01	①(15.2) ②5.1 ④(6.65)	内外面ミガキ 高台部外面ナデ	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内外 10YR4/1 褐灰色	
11	土師質土器	椀	SD01		外面ミガキ 内面ナデ 内外面燻されている	A:1mm以下の白色砂粒を少し含む B:良好 C:内外 N7/ 灰白色~2.5Y 7/2 灰黄色	
12	土師質土器	椀	SD01	①(15.6) ②4.8 ④(6.35)	外面下位ミガキ 内面調整不明 内面と外面の一部燻されて黒変している	A:1mm以下の白色砂粒、雲母を少し含む B:良好 C:内 N6/ 灰色~N4/ 灰色 外 2.5Y8/2 灰白色~2.5Y6/1 黄灰色~2.5Y2/1 黒色	
13	瓦器	椀	Ⅱ区 SD01	①(15.0) ②<5.0> ④(6.8)	体部外面下位ミガキ 他はナデ	A:1mm以下の白色・黒色砂粒を少し含む B:良好 C:内外 N8/ 灰白色	
14	瓦器	椀	Ⅱ区 SD01	①(16.8) ②5.2 ④6.4	内外面ミガキ後ナデ 高台部外面ナデ 高台部外面板状圧痕あり	A:1mm以下の白色砂粒を多く含む B:良好 C:内 2.5Y3/1 黒褐色 外 2.5Y4/1 黄灰色~2.5Y7/2 灰黄色	
15	瓦器	椀	Ⅱ区 SD01	②<2.85> ④(5.4)	外面ミガキ 内面ミガキ後ナデ 他は回転ナデ	A:4mm以下の白色砂粒、石英を含む B:良好 C:内 N7/ 灰白色~N3/ 暗灰色 外 10YR8/1 灰白色~N4/ 灰色	
16	瓦器	椀	Ⅱ区 SD01	①(16.4) ②5.85 ④(6.3)	内外面ミガキ 体部外面一部指オサエ 高台部外面ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内外 10YR7/1 灰白色~10YR2/1 黒色	歪み著しい 内面重ね焼き痕あり
17	瓦器	椀	Ⅱ区 SD01	①(15.7) ②6.05 ④6.0	内外面ミガキ 体部外面一部指オサエ 高台部外面回転ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内外 10YR7/1 灰白色~N4/ 灰色	歪みあり
18	瓦器	椀	Ⅱ区 SD01	②<3.8> ④6.25	外面ミガキ 内面調整不明 高台部外面板状圧痕あり	A:2mm以下の白色砂粒、長石を含む B:良好 C:内 N7/ 灰白色~N3/ 暗灰色 外 N4/ 灰色	歪みあり
19	瓦質土器	火鉢	SD01		肩部外面指オサエ 肩部内面ハケメ 体部内外面ナデ 内面煤付着	A:4mm以下の白色砂粒、長石、石英、雲母を多く含む B:良好 C:内 10YR8/2 灰白色~10YR3/2 黒褐色 外 10YR 8/2 灰白色	
20	白磁	椀	SD01	②<2.25>	内外面施釉	A:精良 B:良好 C:釉 10Y8/1 灰白色 胎土 5Y8/1 灰白色	
21	白磁	椀	Ⅱ区 SD01	②<4.15> ④(6.4)	内面~高台部外面施釉	A:精良 B:良好 C:釉 5Y7/2 灰白色 胎土 2.5Y8/1 灰白色	
22	陶器	壺	Ⅱ区 SD01	②<10.7> ⑤(24.5)	内外面施釉 回転ナデ	A:精良 B:良好 C:釉内面 10YR5/2 灰黄褐色 外面 2.5Y5/2 暗灰黄色 胎土 7.5Y4/1 灰色	
23	土製品	棒状土製品	Ⅱ区 SD01	残存長 10.7 最大幅 5.25 最大厚 3.6	ナデ成形	A:4mm以下の白色砂粒、長石、石英を多く含む B:良好 C:10YR8/3 浅黄褐色~7.5YR7/6 橙色	
24	土製品	棒状土製品	SD01	残存長 11.8 最大幅 4.1 厚さ 2.8	ナデ成形	A:10mm程の小石、3mm以下の白色砂粒、長石、石英を多く含む B:やや軟質 C:7.5YR7/4 にぶい橙色~7.5YR6/1 褐灰色	

第2表 国分田遺跡第4次調査遺物観察表(2)

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)〈残存値〉	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
25	石製品	砥石	II区 SD01	残存長8.4 最大幅5.1 最大厚3.45 重さ223.4	砥面5面使用 欠損面にも使用痕あり		砂岩製
26	石器	石鏃 未製品	II区 SD01	長さ2.5 最大幅1.8 最大厚0.7 重さ2.2			黒曜石製
27	鉄製品	釘	II区 SD01	残存長5.0 幅1.2 厚さ0.75			釘2個体が融着している
28	銅製品	不明品	II区 SD01	長さ1.85 幅1.15 厚さ0.35			
29	土師器	杯	SD02	①13.9 ②2.1 ③8.9	底部外面へラ切り後回転ナデ 他は回転ナデ	A:5mm以下の白色砂粒、長石を含む B:良好 C:内外10YR8/3 浅黄橙色	歪みあり
30	陶器	耳壺か	SD02	②<3.3>	回転ナデ	A:精良 B:良好 C:釉2.5Y4/4 オリーブ褐色 胎土5YR7/4 にぶい橙色	
31	青磁	椀	SD02	②<3.0> ④(5.7)	内外面施釉 見込み象嵌、目跡あり	A:精良 B:良好 C:釉2.5Y4/2 暗灰黄色 胎土2.5Y5/1 黄灰色	
32	鉄製品	釘	SD02	残存長7.85 幅0.5~0.9 厚さ0.6 重さ18.2			
33	土師器	杯	SE01 下層	①11.55 ②2.5	底部外面へラ切り 他は回転ナデ 底部外面板状圧痕あり	A:2mm以下の白色砂粒、長石、石英、雲母を含む B:良好 C:内外10YR8/3 浅黄橙色	
34	土師器	杯	SE01 下層	①(15.1) ②<3.5>	底部外面へラ切り後ナデ 口縁部外面調整不明 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内外7.5YR8/4 浅黄橙色	
35	土師器	杯	SE01	①15.1 ②3.55	外面回転ナデ 内面ナデ 底部外面板状圧痕、黒斑あり	A:1mm以下の石英、雲母を少し、白色砂粒を多く含む B:良好 C:内10YR8/3 浅黄橙色 外10YR8/3 浅黄橙色~N5/灰色	
36	土師器	椀	SE01	①16.4 ②<3.3>	内外面回転ナデ	A:4mm以下の白色砂粒、雲母を多く含む B:良好 C:内10YR8/2 灰白色 外10YR8/3 浅黄橙色~N4/灰色	
37	土師器	椀	SE01 下層	②<3.1> ④(6.15)	内外面回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内7.5YR8/4 浅黄橙色 外2.5YR7/6 橙色	
38	土師器	椀	SE01 下層	②<2.15> ④7.2	底部内面指オサエ 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内外10YR8/3 浅黄橙色	
39	土師器	椀	SE01	②<2.9> ④6.8	内外面回転ナデ	A:1mm以下の石英、雲母を少し、白色砂粒を多く含む B:良好 C:内10YR8/3 浅黄橙色 外10YR8/4 浅黄橙色	

写真図版

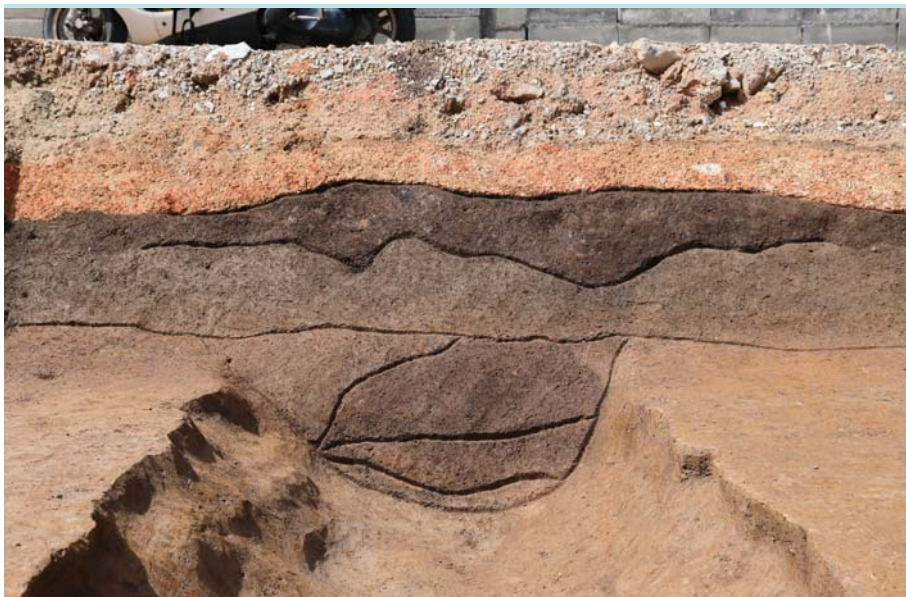


(1) 調査区南半全景 (北から)



(2) 調査区北半全景 (南から)

図版 2



(1) SD01 南壁土層



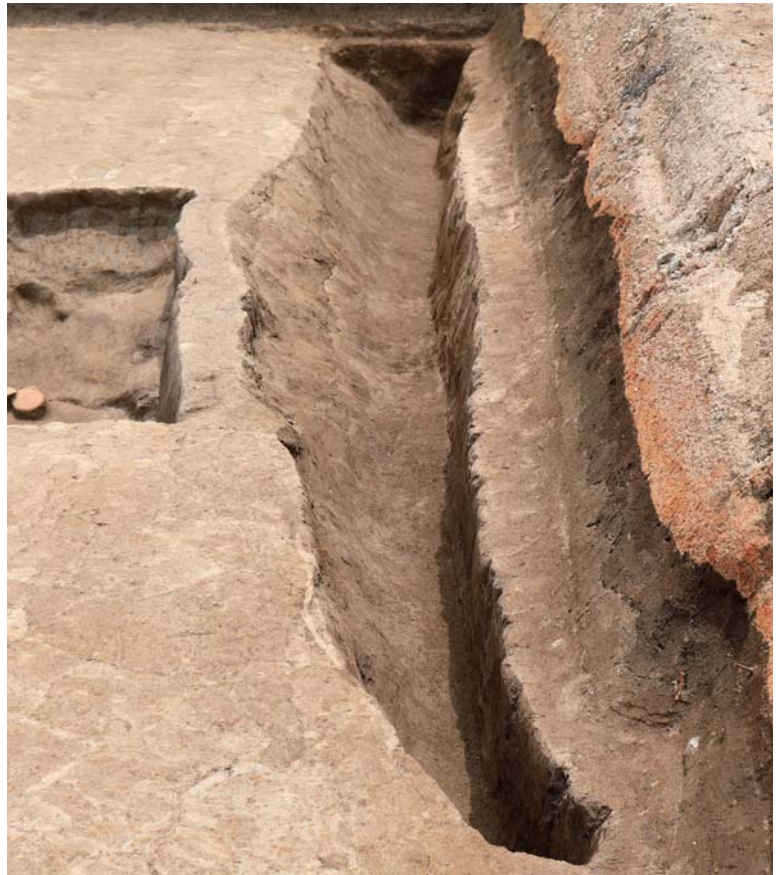
(2) SD01 遺物出土
状況 (北から)



(3) SD01 南半完掘
状況 (北西から)



(1) SD01 北半完掘状況 (南から)



(2) SD02 完掘状況 (東から)

図版 4



(1) SE01 東壁土層



(2) SE01 遺物出土
状況 (北東から)



(3) SE01 完掘状況
(南から)



图版 6



報告書抄録

ふりがな	こくぶたいせき2
書名	国分田遺跡2
副書名	第4次調査
巻次	2
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第212集
編著者名	澤田 康夫・龍 友紀
編集機関	大野城市
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町二丁目2-1 電話092(501)2219
発行年月日	2024年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村	遺跡 番号	北緯 。'。"	東経 。'。"	調査期間	調査 面積	調査原因
こくぶた 国分田遺跡	ふくおかけんおおのじょうし 福岡県大野城市 かわらだ 瓦田二丁目	402192		33° 31' 53"	130° 28' 50"	2022年4月13日 ～6月17日	280m ²	記録保存

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
国分田遺跡 第4次調査	集落跡	古代・中世	溝跡・井戸	土師器・瓦器・ 陶磁器	

要約	国分田遺跡は古代から近世にかけての集落遺跡で、本調査では古代から中世にかけての溝2条と井戸1基、柵列2を確認した。SD01からは焼け歪んだ瓦器碗や棒状土製品などが多く出土しており、集落内で瓦器の焼成を行っていた可能性が高い。
----	--

大野城市文化財調査報告書 第 212 集

国分田遺跡 2

第 4 次調査

令和 6 年 3 月 31 日

発 行 大野城市

〒 816-8510 福岡県大野城市曙町 2-2-1

印 刷 九州コンピュータ印刷

〒 815-0035 福岡市南区向野 1 丁目 19 番 1 号

